

## 三商レポート

### 第五十八話 「妻の遺言準備」

相続プラザ花小金井（株）三商 内藤 雄

Aさんに、住まなくなった空き家の売却を依頼された。Aさんの奥さんから、「この取引が終わったら、遺言を作っておきたいのでいろいろ教えてください」と言われていた。「はい、わかりました。ありがとうございます。思い立った時に遺言を作成しておくことは良いことです。そして安心して長生きしてくださいね。事情が変われば、書き換えることもできますから」と答えていた。

無事に契約を終え、数日たってAさんの運転する車でご夫婦がいらした。奥さんが静かな口調でゆっくりと話し始めた。

「40過ぎの一人娘がいます。旧家に嫁ぎ、子供も2人います。でも、女は三界に家なしと言うでしょ。この先なにがあるかわからない。娘のために、娘の物になるように不動産を遺言で残しておいてやりたいの」と。

話はなおも進む。「近いうちに目の手術をします。他に体の悪いところもあるの。でも先生は、手術の仕様がなくて…。万一のときは、無駄な延命治療はしないでほしいと遺言にしておきたいの」

ここでご主人が口を開いた。「今なにも遺言のことを考えなくてもいいだろう。うちは一人娘。相続でもめることはない。俺とお前のどっちが先に逝っても娘が相続するのだから。それに延命治療をしないでくれと言ったって…。もっと前向きに生きることを考えたらどうだ」と。

それを聞いて奥さんが突然涙を流した。長い沈黙が続く。重い雰囲気。でも、とてもあたたかく感じた。娘を想う母。妻を想う夫。長年連れ添ったご夫婦。しばらくして奥さんが「そうね…」と涙をふき、笑顔が戻った。

この日の話はここで終わった。今回の契約の前に手術を終えたばかりのAさんが、奥さんをいたわるようにして車に向かう。その姿をお見送りしながら、「思い立った時に遺言を作っておくことは良いことです」の言葉が軽く感じられてしまった。大切な場面に同席させていただいた。 (2009. 4. 1)